

## 初級学習者に考えさせる指導法の試み —「ていく」「てくる」の用法の理解を通して—

李 響

### 1. はじめに

「ていく」「てくる」の意味用法は多様であり、初級学習者にとって簡単な学習項目とは言えない。『レベルアップ日本語文法中級』（以下『レベルアップ』）は「いく」「くる」を5つの用法に分けて説明している。「基本動詞ハンドブック」では、「ていく」と「てくる」をそれぞれ7つの用法に細分化している。このような意味用法が多様である学習項目をどのように効果的に指導するかは重要な課題である。従来、「ていく」「てくる」は初、中級に分けて指導することが多く、空間的移動用法は初級、時間的用法と知覚的用法は中級で指導するのが一般的であろう。本稿は、練習問題を利用し、初級学習者が自ら中級レベルの項目である「ていく」「てくる」の時間的用法および知覚的用法が初級レベルの項目である空間的移動の意味用法と関連付けて理解できることを検証する。「ていく」「てくる」のように多様な意味用法を持ち、各用法に関連性がある項目の指導においては、練習問題を利用し、学習者自身で考えさせるという指導法が有効であることを提案する。

### 2. 本稿の位置づけと研究方法

#### 2.1 本稿の位置づけ

従来、「ていく」「てくる」の各意味用法を初級、中級レベルに分けて指導する。『Situational Functional Japanese』（以下は『SFJ』）では、(1) (2) のような空間的移動に関する説明が詳細に書かれているが、(3) (4) のような時間的用法と知覚的用法は書かれていない。

- (1) リサさんに花を持っていきます。
- (2) 電話がかけてきた。
- (3) この子がこれから大きくなっていくのが楽しみです。
- (4) 私は今までずっと両親と一緒に生活してきました。

初級段階で全ての用法を詳細に説明するのは、初級学習者にとって覚える内容が多く、負担が大きいため、最初は基本的な空間的移動の意味用法のみを導入し、中級に入って初めて、時間的な用法などを導入すると考えられる。しかし、許他（2009）により、中級学習者は初級レベルで学習した文法項目であっても正しく運用できず、定着が遅い文法項目が多いということ、さらに、学習者は反復学習を好まず、新しい文法項目の学習を望むということが分かった。また、許（2016）は、学習者自身はイク・クルの文法項目について「母語にも同じ意味がある」「初級で勉強しているから分かる」「使い方は簡単だ」などと述べることから、学習すべき文法項目としての認識が強くないということがわかると述べている。以上のことから、「ていく」「てくる」を初、中級レベルに分けて指導するのが一般的であるが、中級レ

ベルの学習者は「ていく」「てくる」を新しい文法項目と見なさないため、学習意欲が低くなり、習得しにくくなる可能性があると考えられる。そこで、本稿は「ていく」「てくる」を初、中級に分けずに指導する方法を提案する。

## 2.2 研究方法

「ていく」「てくる」の用法は多様である一方、各意味用法はプロトタイプ的な意味から拡張するものだと考えることができ、学習者は各意味用法の関係が分かれば、把握しやすくなると推測される。しかし、多義ネットワークを学習者に提示しても、恐らく学習者は受動的に受け取り、授業外で暗記などをするとと思われる。その結果、学習者の負担が増加する一方だと考える。そこで、期待されるのは学習者自身で各意味用法間の関係を整理することである。そのため、本稿は従来中級レベルで指導された「ていく」「てくる」の時間的用法及び知覚的意味用法を練習問題の形で学習者に提示し、学習者自身で考えさせるという方法を試みる。さらに、学習者の負担をかけないため、時間的用法と知覚的用法に関する練習問題をそれぞれ2問のみ設定する。また、初級学習者が難易度の高い「ていく」「てくる」の意味用法を理解しきれない場合には、教師は簡単に説明を加える。

実施方法としては、2回の指導を行う。1回目は、SFJ Vol2. L15を学習した後、L15を復習する練習問題に「ていく」「てくる」の時間的、知覚的な意味用法に関する練習を入れ、学習者に書いてもらう。2回目は、2週間後に「ていく」「てくる」の時間的、知覚的な意味用法に関する練習をそれぞれ2問作り、学習者に書いてもらう。その後、学習者が「ていく」「てくる」の時間的、知覚的な用法と基本である空間的移動の意味用法の関係が理解できたかを確かめるため、インタビューを実施する。

## 3. 「ていく」「てくる」の意味用法

本稿は、『レベルアップ』に従い、「いく」「くる」の意味用法を以下の5つに分けることにする。

- ①空間的移動（本動詞としての方向） ②動作が向かう方向 ③対象の移動 ④時間的な状態の変化  
⑤知覚

①は本動詞「いく」「くる」の意味であるため、「ていく」「てくる」の意味用法は②～⑤になると考える。②を空間的移動、③を対象の移動、④を時間的用法、⑤を知覚的用法と呼ぶことにする。SFJでは、「ていく」「てくる」について、以下のように、②③に関する記述が見られるが、④⑤には言及していない。

～ていく : doing something and then going

～てくる : doing something and then coming

[V- te ]いく means to do something and go away; (略)

[V- te ]くる means to do something and come/come back. (略)

(pp. 188-189)

## 4. 調査と考察

実習では、L15の文法確認練習問題を作ってみた。文法確認練習問題とは、学習者がL15で学習した文法項目を理解したかどうか、正しく使えるかどうかを確かめるためのものである。

補助動詞の「ていく」「てくる」はL15で学習した項目であるが、3節で述べたように、SFJは空間的移動の用法のみを導入及び説明した。そこで、確認問題を作成した際に、まず、すでに学習した空間的移動の用法に関する練習を設定し、さらに、難易度を上げ、時間的と知覚的な用法も加えた。この練習問題を通して、学習者は未習である時間的と知覚的な用法を既習の空間的移動と関連付け、正しく使える可能性があるかを確認する。

2週間後に、もう一回練習問題を作り、学習者に協力してもらった。学習者が練習問題を正しく解答できるかということから、確認問題に出てきた時間的と知覚的な用法を理解したか、正しく使えるかを確認する。

最後に、二回目の実験が終わった時点で、インタビューを行った。「これを選択した理由を述べてください」「空間的な移動と関連付けていると考えていますか」のような質問を通して、学習者は自ら「ていく」「てくる」の各意味用法間の関係性を整理できたかを確認する。

#### 4.1 調査の概要

- ・対象：G30 日本語 A クラスを受講する初級レベルの日本語学習者 2 名（以下、S1 と S2）
- ・方法：2 回の選択式の練習問題及び 1 回のインタビューを実施する。全て紙媒体で実施した。
- ・期間：1 回目の調査は 2016 年 12 月末に授業内で実施する。  
2 回目の調査とインタビューは 2016 年 1 月に授業外で実施する。
- ・内容：1 回目の練習問題は (5) ~ (8)、2 回目の練習問題は (9) ~ (12) である。(5) (6) (9) (10) は、時間的な用法に関する練習であり、(7) (8) (11) (12) は知覚的な用法に関する練習である<sup>1</sup>。

- (5) この子がこれから大きくなって<a. くる b. いく>のが楽しみです。
- (6) 私は今までずっと両親と一緒に生活して<a. きました b. いきました>。
- (7) ほら、向こうに海が見えて<a. きたでしょう b. いったでしょう>。目的地はもうすぐですよ。
- (8) 悲しい映画を見ていたら、涙が出て<a. きました b. いきました>。
- (9) 国に帰ってからも日本語の勉強を続けて<a. くる b. いく>つもりです。
- (10) 日本で学ぶ留学生の数が増えて<a. きました b. いきました>。これからも増えて<a. くる b. いく>だろう。(増える：increase)
- (11) 隣の家から変なにおいがして<a. きました b. いきました>。(におい：smell)
- (12) お寺から鐘の音が聞こえて<a. きます b. いきます>。(鐘：bell)

2 回目の調査が終わった時点で、学習者は時間的な用法と知覚的な用法を空間的な移動用法と関連付けて理解できたかを確認するため、インタビューを実施した。学習者の日本語のレベルを考慮し、英訳

<sup>1</sup> 1 回目の調査では、初級学習者への配慮が不足しており、未習漢字にルビを記さず、未習語彙に英語の意味解釈も加えなかったが、この調査は授業で実施し、「わからない語彙があったら、聞いてください」という指示を出した。

付けのインタビュー用紙を配った。そして、「英語で答えてもよい」と指示した。

#### 4.2 調査の結果と考察

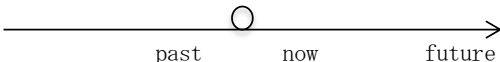
1回目の調査結果を表2に示す。

表2 1回目の調査結果

	(5)	(6)	(7)	(8)
S1	△ <sup>2</sup>	×	×	×
S2	×	△	×	×

表2を見ると、二人の学習者は(5)～(8)の練習問題をほとんどできなかったことがわかる。(5)(6)は、それぞれS2、S1に答えてもらい、正解ができなかった時点で、教師は正解を教えた。(7)(8)はS1が正解できず、続けてS2もできなかったため、教師は正解を教えた。しかしその際に、学習者は戸惑った様子であり、理解できなかったようである。そこで、教師は時間的な用法と知覚的な用法をまとめて以下のように簡単に説明をした。

(13) 時間的な用法について

板書：

口頭説明：pastは「～てきました」、futureは「～ていきます」を使う。

(14) 知覚的な用法について

実物教授：(ペンを用い) ペンを学習者にだんだん近づけていく。

口頭説明：「海が見えてくる」はこういう感じです。

以上からわかるように、学習者に簡単に理解してもらうため、板書や実物を用いたが、全体的には説明は簡単でやや短かった。時間的な用法の場合は、過去のことを「～てくる」、未来のことを「～ていく」を使うというように説明をし、移動の方向性にはほとんど触れていなかった。知覚的な用法の場合では、一言で「海が見えてくる」のイメージを説明した。教師は簡潔なことばで二つの用法を説明したが、各用法についての説明は詳細とは言えず、且つ「ていく」「てくる」の基本的な意味の関連性にも触れていなかった。従来の中級レベルで見られる導入や説明と比べ、ここでの説明は、用法の説明であると言うより、練習問題の説明だというほうが適切である。

2週間後に、2回目の実験を行い、調査結果を表3に示す。

<sup>2</sup> 授業では、一人ずつ答えてもらうため、順番になっていない学習者は正解かどうかを確認できず、△で記す。また、誰も答えられない問題は、×で記す。

表3 2回目の調査結果

	(9)	(10)	(11)	(12)
S1	○	○	○	○
S2	○	○	○	○

表3を見ると、(9)～(12)の練習問題はすべて正解だった。合計2回の練習問題を解き、教師の簡単な説明を聞き、学習者はどのように「てくる」「ていく」の各用法を理解しているのかを確認するため、インタビューを実施した。インタビューの結果を以下にまとめる。

Q1: 問題(9)は、どうして「b. いく」を選びましたか。

S1: I will go だから。

S2: Because これから 'future' 。

Q2: 問題(10)は、どうしてこのように選びましたか。

S1: ①since past、it means 'past'、② same as (9)。

S2: ①前の test<sup>3</sup>と同じ。

②it means 'it going to' 。

(9)と(10)は時間的な用法に関する問題である。Q1、2の答えを見ると、学習者は、「てくる」は 'past' のことを表し、「ていく」は 'future'、'it going to' のことを表すと考えていることが分かった。しかし、基本的な用法である空間的な移動との関連について何も述べていなかった。

Q3: 問題(11)は、どうして「a. くる」を選びましたか。

S1: これも前の 'test'、I am here and it comes to me.

S2: 外から私に。

Q4: 問題(12)は、どうして「a. くる」を選びましたか。

S1、2: (11)と同じ。

(11)(12)は知覚的な用法に関する問題である。Q3、4の答えを見ると、学習者は、このような「てくる」はある現象が起こるというように理解せず、移動(it comes to me、「外から私に」)として理解していることが分かった。つまり、学習者は知覚的な用法を空間的な移動と関連付けて理解していると考えられる。

本稿は、学習者が時間的と知覚的な用法を空間的な移動用法と関連付けて考えているか否かを確認するため、さらにQ5、Q6を質問したところ、5、6のいずれも、関連付けがあると述べていた。以下に具体的な「関連付け」をまとめる。

<sup>3</sup> 「何の test ですか」と聞き返すと、1回目の練習問題のことを指していることが分かった。

Q5: 「リサさんに花を持っていきます」の「ていく」は (9) (10) の「ていく」と関連付けがあると考えますか。なぜですか。

S1: 「花を持っていく」は to go somewhere、(9) (10) は away from now.

S2: It means away from , it same to (9) (10) .

Q6: 「さとうを買ってきました」の「てくる」は (10) の「てくる」と関連付けがあると考えますか。なぜですか。

S1、2: 「さとうを買ってきました」は comes back、(10) は nears to now.

Q5、6の答えを見ると、学習者は時間的な用法について、「てくる」は nears to now、それに対し、「ていく」は away from now を表すと考えている。つまり、視点を「現在 (now)」に置き、「てくる」「ていく」を、それぞれ「近づいてくる (near)」「遠ざかっていく (away)」と理解していると考えられる。以上から、学習者が時間的な用法において、「てくる」「ていく」の対立関係を理解でき、そして空間的な移動用法との関連性にも気づいたと考える。

Q7: 「さとうを買ってきました」の「てくる」は (11) (12) の「てくる」と関連付けがあると考えますか。なぜですか。

S1: (11) (12) は something nears to me.

S2: Means near to me.

学習者は「近づいてくる (near)」を使い、知覚的な「てくる」を説明することから、知覚的な用法と空間的な移動用法と関連付けて理解していると考えられる。

さらに、学習者は「ていく」「てくる」と本動詞「いく」「くる」の間の関連性について気づいたかどうかを確かめるため、Q8を質問した。学習者の二人は関連性が「ある」と答えた。理由は以下にまとめる。

Q8: ここに出た「ていく」「てくる」はそれぞれ「私は東京に行く」の「いく」、「友だちは大阪に来る」の「くる」と関連付けがあると考えますか。なぜですか。

S1: 「くる」means comes to me、「てくる」means come back to here.

「いく」means away from me、「ていく」means something away from me.

S2: (手を遠くから近くに移動しながら) It means come here.

(手を近くから遠くに移動しながら) It means go away.

Q8の答えを見ると、学習者は「くる」と「てくる」を説明する場合には、同じ動詞 'come' を使い、それぞれ 'comes to me' 'comes back to here' と英語で解釈する。その解釈から、話者への移動 ('to me' 'to here') という意味がうかがえる。また、「いく」と「ていく」を説明する場合には、'away from' を使い、「話者から遠ざかる」という意味もうかがえる。

以上のことから、学習者は少量の練習問題と教師の簡単な説明を通して、「ていく」「てくる」の各意味用法を理解できることを確かめ、このような指導法の有効性を確認した。

## 5. まとめ

本稿では、従来中級で導入する「ていく」「てくる」の項目を練習問題という形で初級学習者に導入した。いくつかの練習問題を学習者に提示し、学習者自身に考えさせることにより、未習項目と既習項目の関連性に気づかせることができることを確認した。関連性がある項目の指導では、このような指導方法の有効性を証明し、指導法の一つとして提案する。

## 6. 課題

実験対象は二人のみで、初級学習者の中では、比較的高いレベルの学習者であったため、今後多数を対象とし、実験を行う必要があると考える。また、用法が多様でありながら、各用法の間に関連性がある項目は少なくない。例えば、補助動詞「～である」「～しておく」、動詞の「かける」「とる」などに関しては、今後試行してみたい項目である。その中に、関連性が捉えやすいものと捉えにくいものがあると考えられ、捉えにくい項目を指導する際に、本稿の提案は有効であるかを検討する余地があると考えられる。

## 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（著）巴奎維・陳娟（訳）（2006）『初級日語語法精解』外語教学与研究出版社
- 筑波ランゲージグループ（1992）『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Vol:2 NOTES』凡人社
- 筑波ランゲージグループ（1992）『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Vol:2 DRILLS』凡人社
- 許明子、小川恭平（2016）「中級日本語学習者の移動動詞「行く」「来る」の習得について-学習者の使用状況に関する調査を通して-」『Journal of International and Advanced Japanese Studies』8号, 277-297.
- 許明子・鶴町佳子（2009）「日本語学習者の中級レベル観」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』24号, 19-36.
- 許明子、宮崎恵子（2013）『レベルアップ日本語文法 中級』くろしお出版

## 参照サイト

- 基本動詞ハンドブック（ていく）：<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/te-iku/>（閲覧日：2017年02月11日）
- 基本動詞ハンドブック（てくる）：<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/te-kuru/>（閲覧日：2017年02月11日）